

救助技術高度化検討会に係る消防本部訓練視察結果について

1 視察日時

令和4年9月5日（月）10時00分から11時30分

2 視察場所

東京都葛飾区高砂1-1-1 奥戸訓練場
東京消防庁 警防部 救助課 即応対処部隊

3 視察者

東京理科大学 総合研究院 小林座長
早稲田大学 理工学術院 小松原委員
慶應義塾大学 理工学部 中西委員
仙台白百合女子大学 人間学部 山崎委員

4 視察スケジュール

時間	内容
10:00～10:05	挨拶等
10:05～10:40	訓練（はしご水平救助第2法）
10:40～10:45	休憩・移動
10:45～11:30	質疑応答・意見交換
11:30	終了

5 訓練視察内容

訓練前ブリーフィング → 安全点検・資機材確認 → 訓練 → 資機材撤収（出動態勢） → 振り返り

※東京消防庁では、訓練マニュアルを策定している。

6 質疑応答・意見交換

別紙のとおり

○有識者委員

危険な現場で活動する救助隊は、自身の安全確保が必要であるが、訓練を拝見して、考えずに自然にできていると感じた。自身のスキルアップを図りつつ、チームワークも十分に構築されていることを窺えた。

○有識者委員

Q. 過去の経験において、訓練で培ってきた知識や技術で対応できなかった災害はあるか。
A. 災害現場の状況は千差万別であるが、過去に実施してきた救助活動に似たような方法にもっていくことも考慮しながら活動しており、これまで対応できなかったことはないと思っている。また、救助操法をはじめとする基本訓練など、今までやってきたことをつなぎ合わせることで対応できると考えている。

課題としては、切断できない構造材等が増えてきており、今後、資機材の見直しが必要である。しかし、資機材の整備のみならず、保有する資機材でどう対応できるかなどについても検証を行っている。

○有識者委員

Q. 海外において、太陽光パネルや電気自動車の火災などの事案が発生していることを目にするが、対応等はどうかされているか。
A. すでに活動マニュアルが整備されているため、当該マニュアルに沿った消火戦術が確立されている。

○有識者委員

Q. 阿吽の呼吸で訓練されていたが、本日、訓練に参加した救助隊員は同じ消防学校を卒業されたのか。また、大規模災害時において、異なる消防学校を卒業した救助隊員等は、合図、声のかけ方、救出の方法などに違いがあると思われるが、同じ現場で活動する時に支障はないのか。
A. 熱海市土石流災害を例とした場合、消防機関のみならず、関係機関も同じ現場に入って活動したが、基本的に関係機関の部隊単位で活動するため、特に支障を来たすことはなかった。また、緊急消防援助隊は、都道府県単位で活動しており、消防本部が多い都道府県などに関しては、詳細は違うけれど、活動のベースは同じであり、大きな差異が生じることはほとんどないため、十分に活動できる。活動現場で困ったということはあまりない。

合図、声のかけ方の違いと言え、要救助者の呼び方などを各消防本部で取り決めていることはある。(例：要救助者、要救、暗号化(252など))

○有識者委員

Q. 救助マニュアルは各自治体で策定されているのか。
A. お見込みのとおりである。

消防庁が策定したマニュアルなどをベースとして、各自治体が地域実情に応じてアレ

ンジして策定している。

○救助隊員（有識者委員に対しての質問）

Q. 新人の救助隊員や経験の浅い隊員に対して、厳しい訓練が良い訓練であるといった風潮が残っていたりもするなか、それが良いか悪いかは別として、効果的な指導方法などについて御教示いただきたい。

A. 以前は、水分補給をさせない、怪我の寸前まで訓練するといった指導方法などもあったが、教育方法や指導方法は、時代とともに変わる。訓練する隊員に学ぶ力やモチベーションを持たせることで、個人の能力は上がり、結果的に組織力の向上につながる。

また、何をやるかの目標設定をすることが大切で共通認識を持たなくてはならない。その中で、組織は何をしようとしているのか考えて自分が何をすべきか、何をしたらまわりがよく進むか、自分が歯車として欠かせないことを認識しながら座学も取り入れて実際にアクティブラーニングをしていく。終わったら必ず振り返りを行っていく。今回（即応対処部隊の訓練）には、それが全部入っており、素晴らしいと感じた。教育で一番大事なことは言葉で言っても通じない。いいモデルを見ることでいいイメージを持たせてこうしたいというモチベーションを高めてさせてマインドを共有したうえでスキルトレーニングをしていく。

マインドについては、オリンピックで金メダルを獲得した選手を例にしてあげると、以前は国家を背負って大会に臨んでいたが、昨今は、競技を楽しみながら伸び伸びと取り組んでいる選手も結果を残している。こういった点からもマインドを育てることは、大変重要であり、科学的な要素を取り入れていくことも必要となっている。

基本的なことで譲れない部分、譲ってはいけない部分を厳しく指導することは決して悪いことではない。一方で、応用の面まで厳しく指導するのはあまり良い効果が生まれない。厳しい口調で指導するといった方法もあるが、「こうすればいいんじゃない？」といった問いかけるような指導方法も効果的である。

○事務局（即応対処部隊への質問）

Q. 今年度の検討会は、中核人材の育成をテーマとして救助隊長にフォーカスを当て、隊員のボトムアップを牽引していく救助隊長のあり方について検討しているところである。今回の訓練では、副隊長に指揮を執らせていたが、何か理由があるのか。

A. 隊長の役割として安全管理と隊員の育成がある。隊長が一步引いた位置から俯瞰的に見て、安全管理に注視しているほか、副隊長が中心となって訓練を進めることで、副隊長の育成を行っている。現場活動では、隊長が救出方法の指示を出し、活動の先端では副隊長が隊員に指示を出している。そのため、訓練において、指揮など隊員を動かす能力を身に付けさせている。また、副隊長に限らず、各隊員が広い視野を持つとともに隊員の成長を促すために訓練時においては、訓練指揮者のローテーションなども実施している。

○事務局（即応対処部隊への質問）

Q. 救助隊長を育成するために大事なことは何か。

A. 救助隊長として、カッコいい姿や背中を見せるといった理想論はあるものの、それはあくまで理想と考えており、隊長自身も一生懸命さを見せることが大事だと考えている。隊長だからやらなくていいというわけではなく、自分が見せて、一緒に取り組むような隊長であるべきと考えている。また、隊長隊員の育成にあたっては、職場の環境や雰囲気は、大変重要な要素であるため、（即応対処部隊総括部隊長として）風の通しが良く、コミュニケーションがとりやすい環境作りに努めている。

○事務局（即応対処部隊への質問）

Q. 訓練後の振り返りで隊員に意見を求める順番について、配慮されていたようであるが、いかがか。

A. 上席の隊員から意見を述べることで、部下も意見が言いやすくなる環境になるのではないかと考えている。

○事務局（即応対処部隊への質問）

Q. これまでの経験のなかで、ヒヤリハットの有無、失敗の経験から改善していることなどはあるか。

A. 基本的に訓練は失敗させる場、失敗する場と考えており、どんどん失敗させて、隊員に考える機会を与えている。また、現場で失敗することは許されないことではあるが、細かいミスなど何かしらの反省点はあるため、修正を重ねて改善を図っている。

以上

(参考) 東京消防庁の標準的な訓練の流れ ※視察時

(訓練前ブリーフィング)



(安全点検・資機材確認)



(訓練)



※緑のベストは安全主任者・安全員



(訓練終了後の振り返り)

